

エコツーリズムによる震災復興支援の実証的研究

——岩手県宮古市における研究 1000 年の絆を紡ぐ宝探し調査——

Empirical studies of earthquake reconstruction assistance through eco-tourism in Miyako city, Iwate

From over thousand years treasure hunting to Ecotourism

海津ゆりえ* 真板昭夫** 橋本俊哉*** 堀木美告****

Yurie Kaizu Akio Maita Toshiya Hashimoto Mitsugu Horiki

The Great East Earthquake Japan caused serious and big damage to ocean side cities of 4 prefectures. Historically and geologically, it is not unusual matter for the area to be suffered from such a big disaster. People always recovered from big loss and continued to live for a long time. The energy resource for people to recover and to live as before might be in local nature, culture, food, lifestyle, community and festivals. This study aims to treasure (resources) hunting with local people and plan tourism program utilizing those resources in Miyako, Iwate. From result, 1) Kagura (Shinto dance) has important role to encourage people to live this area continuously, 2) Diversity of food and local products proud of lifestyle of every season. It is suggested that Ecotourism, utilizing local resources, would be a measure to help recovery from the disaster.

キーワード：宮古市 (Miyako)、エコツーリズム (Ecotourism)、宝探し (treasure hunting)、フェノロジー (Phenology)、神楽 (Kagura)

1. はじめに

(1) 調査主旨

2万人を超える死者・行方不明者を出し、「未曾有」と繰り返し報道されてきた東日本大震災であるが、実は三陸沿岸は貞観時代より幾度も大地震と大津波に遭遇してきた所謂「津波常習地」である。しかし住民はこの地を捨てることなく、たびたび地震に見舞われることをも地域の特性とし、子孫に伝えるべき知恵の一つに数えて住み続けてきた。そのことは重要な意味をもつ。住み続けるとは、地域の誇り（「宝」）を連綿と継承してきたということだからである。これらの地域が今日に至っている背景には、土地への誇りが精神的な支えとなり、人々に復興へ向かうエネルギー源を供給してきたからであろう。これから長期間に及ぶことが予想されている今回の復興においても、住民が先祖から伝えられた地域の宝を生きる力や文化をとして読み取り、コミュニティを再びつないでいくことが鍵となるはずである。

観光は、地域の宝を伝え、かつ収益をも得る方法であるが、被災地での人的・物的被害や復旧状況が不均衡に進んでいる現状から、ハード整備を前提とする従前の観光スタイルの復興は今すぐ望めるも

のではない。むしろ地震・津波を超えて地域に残された資源を活用したエコツーリズムが有効であると考えられる。

そこで本研究は、地域の宝が、被災から復興へと、地域の人々が再び活力を取り戻すにあたって重要な絆として精神的な支えとなるとの認識にもとづき、被災地域住民へのヒアリング調査により、震災のなかで生き残った自然・生活文化・生業・技術等の「宝」の掘り起こしを行い、それらを活かして住民が参加できるエコツアーの実施により、被災地域の宝を核とした地域復興プランを住民とともに検討・作成することを主旨とした。

対象地には岩手県宮古市を選定した。同市はスーパー堤防で知られる田老地区が震災後知られるようになったが、浄土ヶ浜を有する観光地であり、本州随一の鮭の生産量を誇る漁業地域でもある。同市の代表的な宝として、廻り神楽として国指定文化財に指定されている黒森神楽がある。本調査では、黒森神楽や生業、食等に注目して行うこととした。

(2) 調査目的

岩手県宮古市を対象地とし次の3点を目的とした。

- ① 対象地における震災前の観光資源の賦存状況を把握しデータベース化を行うこと。

- ② 自然・生活文化・生業等の宝の把握とフェノロジーカレンダーを作成すること。
- ③ 調査結果をもとにした「宝を活かした地域復興プラン」を提案すること。

(3) 研究手法

本研究は、文献調査と宮古市におけるヒアリング調査、ならびに現地踏査により行った。現地踏査日程は表1、ヒアリング対象者は表2の通りである。

表—1 調査日程

月日	主旨	場所
2011年7月14日	宮古市長面会	盛岡
8月8日	宮古市商業観光課打ち合わせ、宿泊所下見	宮古
8月11日	事前研修	東京
8月22～27日	ヒアリング調査	宮古
10月24日	ヒアリング調査、東北海岸自然歩道踏査	宮古
12月28日	ヒアリング調査	大宮
2012年1月3～5日	黒森神楽視察調査、ヒアリング調査	宮古
3月4日	宮古市商業観光課打ち合わせ	宮古
3月17～18日	東北海岸自然歩道踏査	宮古

表—2 ヒアリング対象者

テーマ	人数	対象者
市全般	2	副市長、企画課
市の観光	2	観光課、観光協会
神楽	10	神社氏子総代、神楽保存会、教育委員会、神楽研究者
漁業	1	岩手県立水産科学館
農業	1	農業従事者
食	2	生活改善グループ、南部鮭加工研究会
自然	7	環境省、パークボランティア、教育委員会
まちづくり	2	NPO法人(立ち上がるぞ!宮古市田老)
延べ人数	27	

(4) 調査体制

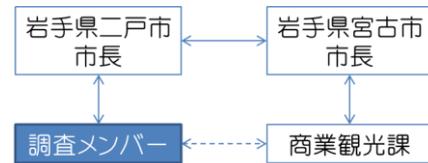
本調査は、調査者ら(海津・真板)が20年間に亘り「宝探し」を支援してきた岩手県二戸市を仲立ちとし、岩手県二戸市長と宮古市長の連携のもと宮古

市商業観光課を現地窓口担当とし、ヒアリング対象者の選定や連絡等を依頼した。ヒアリングの可否の判断は対象者個人の状況への考慮が必要となるため、同課に一任した。

調査メンバーは以下に示す19名である。

表—3 調査メンバー

学会員	海津ゆりえ	文教大学国際学部
	真板昭夫	京都嵯峨芸術大学教授
	橋本俊哉	立教大学観光学部教授
	堀木美告	(財)日本交通公社主任研究員
学会員外協力者	比田井和子	未来政策研究所研究員
	緒川弘孝	コンサルタント
	五日市知之	二戸市
	川上陽介	二戸市
	斉藤理基、野澤優介、大内亜津美、須田陽果、石原濟世、菊池有宇(文教大学学生)	
	土橋歩美、藤田悠惟、佐川礼、金杉なつみ、山本陽太(立教大学学生)	



図—1 調査体制図

2. 調査結果

(1) 宮古市における被災状況と観光資源

東北地方太平洋沖地震による宮古市の震度は5強ないし5弱、2012年3月9日現在の被災状況は死者527名(認定含む)、行方不明者107名、倒壊家屋4,675戸であり¹⁾、重茂半島姉吉で津波最大波高(40.5m)を記録した⁽¹⁾。

観光資源の被害状況に関する堀木らの調査²⁾をまとめると以下の表3の通りである。従来より宮古市の観光の中心であったリアス式海岸特有の景観資源への影響は少ないが、周辺のインフラやアクセス道に地震の影響が見られた。

表—4 宮古市における観光資源被災状況²⁾

区分	資源名称	状況評価	
		資源	利用
海岸	大須賀海水浴場	○*	×*
キャンプ場	姉吉キャンプ場	×	×
原野	十二神自然観察教育林	◎*	◎*
岩石・洞窟	トドヶ崎	◎*	×*

区分	資源名称		状況評価	
			資源	利用
海岸	女遊戸海水浴場		△	×
キャンプ場	中の浜キャンプ場		×	×
岩石・洞窟	姉ヶ崎		◎	◎
博物館	県立水産科学館		◎	◎
海岸	浄土ヶ浜一帯	景観(遠景)	◎*	○*
海岸		活動対象	○	×
		鑑賞対象(近景)	○	○
海岸	蛸の浜	○	×*	
島	日出島		◎*	×*
岩石・洞窟	ローソク岩		◎*	×*
岩石・洞窟	潮吹穴		—	×
海岸	真崎海岸		—	×
キャンプ場	沼の浜キャンプ場		×	×
岩石・洞窟	三王岩		◎	◎
施設	シートピアなあと		×	×

凡例：「観光資源そのものの状況」の評価基準

記号	観光資源の状況	利用の状況
◎	影響は見られない	影響は見られない
○	資源の一部について軽微な影響が見られる	一定の制約の上であれば観光利用が可能
△	資源の一部について重大な影響が見られる	
×	資源は元の姿を全く留めていない	現状では観光利用は不可能
—	目視による確認ができなかった	目視による確認ができなかった

特に浄土ヶ浜の新築のレストハウスは1階部分が冠水し壊滅的な被害を受け営業不能となり、遊歩道の一部やトイレ等も津波で破壊され、観光船も2隻のうち1隻が流された。2012年4月より開始されるJR東日本 destinations キャンペーンや東北観光博に対応するため、プレハブによる仮設レストハウス建設が進められている。

沿岸域に主要な生産拠点を置いていた宮古では、鮭の養殖場や漁港の製氷工場、市場等が壊滅的に破壊され定置網も流された。津軽石等でのサケの放流や漁港活動、魚商いの復旧等には未だ時間を要する状況である。

(2) 宮古の宝

ヒアリング調査により、次のような宮古の資源が把握された。

1) 黒森神楽

国指定重要無形文化財である黒森神楽は、宮古市山口地区を拠点とする神楽であるが、沿岸域を広範囲に巡行する稀有な形態を伝えている。毎年1月3

日に黒森神社の御神体を移した権現様(獅子頭)を携え、3月初旬まで三陸沿岸一帯を巡行する。宮古市以北の岩泉町、野田村、普代村、田野畑村を回る北回り巡行ルートと、宮古市、旧新里村、山田町、大槌町を回る南回り巡行ルートがあり、毎年交互にどちらかのルートをたどる。元来は集落の家々にて門付して神楽を舞ったが、近年は公民館等の公演が増えて夜神楽は少なくなったものの、山間部では今も屋敷に神楽衆を迎え入れる「神楽宿」が残されている。

東北は修験者が伝えた神楽が多く残り、現在も各地で演じられている重要な芸能であるが、心待ちにする存在であり、これまでも飢饉等災害があると盛大に舞われてきた。



写真—1 黒森神楽(「墓獅子」)

2) 食

宮古は伝統的な行事食と日常食とがあり、沿岸域、閉伊川沿いの里山城とでは食材が異なり、季節感と地域性が色濃く反映されている。代表的な食材として、沿岸域におけるサケ、ホタテ、カキ、里山城におけるクルミが挙げられる。これらの食材は婚姻や震災後の人々の移動等によって文化として各地に伝えられている。

3) 道

宮古市を含む三陸沿岸域一帯は、海岸線に平行して南北を結ぶルートと、内陸から沿岸に向けて流れる河川沿いの東西ルートとが各都市や集落を結んでいる。南北を結ぶルートには、国道45号線と三陸鉄道、リアス式海岸の縁を沿うように整備された東北海岸自然歩道、港と港を結ぶ航路など数本の道が存在する。これらの道は物資や特産品や技術などを運び、伝え沿岸域の経済を支える道ということが出来る。東西を結ぶルートは、海の幸と山の幸が行き来し、災害(沿岸域の地震や津波、時化、山間部の飢饉や土砂崩れ等)の際には相互に助け合う、命を支える道であった。今回の震災時においても、岩手県では内陸部の自治体が沿岸域の自治体を援助するしくみが速やかに確立され、現在も継続している。

4) 地震・津波の教訓を伝える知恵

表—4は、東北地方を襲った過去の地震・津波の歴史であり、これより同地が巨大地震常習地であることが明らかである。宮古市では地震より津波による被害が甚大になる地理的特徴があることから、随所に地震や津波に関する忠告を記した碑が建立されている。例えば、浄土ヶ浜にある昭和三陸地震津波記念碑には次のように刻まれている。

- 一. 大地震の後には津浪が来る
- 一. 大地震があったら高い所へ集れ
- 一. 津浪に追はれたら何処でも高い所へ
- 一. 遠くへ逃げれば津浪に追い付かる 常に逃げ場を用意して置け
- 一. 家を建てるなら津浪の来ぬ安全地帯へ

表—4 東北の震災史 (宮古市史等による)

年代	名称	震度	
830	天長 7	出羽天長大地震	7-7.5
850	嘉祥 3	出羽嘉祥地震・津波	7.0
869	貞観 11	多賀城地震	8.3
1611	慶長 16	慶長三陸地震津波	8.1
1677	延宝 5	延宝八戸地震津波	7.25-7.5
1694	元禄 7	能代地震	7.0
1772	明和 9		6.75
1793	寛政 5		8.3-8.4
1856	安政 5	安政の八戸沖地震	7.5
1896	明治 29	明治三陸地震津波	8.25
1933	昭和 8	昭和三陸地震津波	8.1
1952	昭和 27	十勝沖地震	8.2
1960	昭和 35	チリ地震津波	8.5-9.5
1968	昭和 43	1968年十勝沖地震	7.9
1978	昭和 53	1978年宮城県沖地震	7.4
2011	平成 23	東北地方太平洋沖地震	9.0

東日本大震災で甚大な被害を受けた田老地区では、震災のことや防災教育を伝える活動を含む地域興しをめざし、NPO法人「立ち上がるぞ!宮古市田老」を設立し、人材育成を開始した。2012年3月現在、この活動は宮古観光協会に引き継がれている。

(3) 宮古市のフェノロジー

フェノロジーとは生物学用語で「生物季節学」という意味であるが、対象となる生物を人や人の営みに展開すると、地域における自然・文化・行事・生業・食など多様なテーマに基づく暦を作ることができる。この暦を活用すると、各季節ごとの地域像が

明らかとなり、地域の生活の疑似体験を構成することができ、その応用として季節ごとのきめ細かい地域の宝を発信する観光プログラムを作ることが可能である。本調査の結果をもとに、宮古市のフェノロジーを作成した。来年度は現地で改訂を行い、観光プログラムへの応用を実施する予定である。表—5にその一部を示した。

表—5 宮古市のフェノロジーの例(行事編・部分)

大分類	小分類	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月	
		上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬
年中行事	伝統行事			おしらせまひらき (15日)						浄土ヶ浜まつり (4月下旬～5月上旬)					黒森神社 (中旬)
										陸中海岸国立指定記念祭 (2日)					宮古 (下旬)
															駒形神社例祭

(4) 宝を

活かした地域復興プラン

本調査による宝探しとフェノロジーを活用したエコツーリズム展開方策の一例として、次年度にウォーキングイベント開催することを企画した。この企画は、黒森神楽を軸として宮古市の資源の体験を組み込んだコースとプログラム開発、ガイド育成と活用、実施のための組織づくりなどいくつもの要素を組み込んで実現し、終了後にそれらのソフトが残るというものであるが、本調査主旨に賛同いただいた株式会社J R東日本ウォータービジネスの寄付を活用することになっている。

4. エコツーリズムによる震災復興支援

本調査は壊滅的な被害をもたらした災害からの復興に際して、地域に人々が住み続ける根拠である地域の誇り(=宝)および宝を活かした観光が、再生への足掛かりとなる可能性を示唆した。次年度はその応用をはかることにより、フィージビリティを検証する予定である。

謝辞: 本調査は宮古市商業観光課、教育委員会、二戸市より多大な協力を得て実現しました。深く感謝致します。

【補注】

(1) その後、最大波高は宮城県女川町沖の無人島、笠貝島の43mであったと発表された(3月16日)。

【参考文献】

- 1) 宮古市災害対策本部 (2012) : 報道機関提供情報 81
- 2) 財団法人日本交通公社 (2011) : 東北地方太平洋沖地震後の陸中海岸地域における観光資源の状況把握調査